

ルーヴル美術館展 肖像藝術— 人は人をどう表現してきたか

国立新美術館（東京・六本木） 2018.05.30～09.03

人の顔立ちや姿を表す「**絵画**」や「**彫刻**」は、古代から長い歴史を持つ芸術ジャンルで、国や地域を問わず様々な人々が様々な理由で多彩な手法を用いて、人の似姿を表そうとしてきた結果、「**肖像芸術**」は実にバラエティに富む表現を内包することになった。

本展は、「**美しき顔**」「**権力者の顔**」「**死者の顔**」「**脅威の顔**」から構成され、「肖像芸術」の豊潤さをルーヴル美術館所蔵の傑作で展覧する企画で、「古代エジプトの仮面」から「英雄ナポレオン像」、「世紀の美女や子供の肖像画」までの“顔”が勢揃いしている。これらの「肖像」は、モデルとなった人物の美や名声を讃えて記憶に留めようとするものや、死者を悼み祈念するもの、権力者の力を誇示するものなど「肖像」は様々な役割を有している。

ヴェロネーゼ 《女性の肖像》、通称《美しきナーニ》 1560年頃 油彩/カンヴァス



画伯の「肖像芸術」の一つの頂点を示す作品で、画面一杯に全身に近い肖像を描きだし、わずかな頭部の動きと手の表情だけにアクセントを添えている。

モデルの女性は、はにかむような微笑を浮かべ、上質な青のドレスに身を包み、ルビーやサファイアを配した指輪やブレスレット、真珠のネックレス、肩に金の装飾を身に付けている優雅な装いから、ヴェネツィアの上流階級の貴族夫人とされている。

本作品は、細かな筆触効果によって、衣服や装身具などの質感や光の効果があって美しいために、《美しきナーニ》という通称名がつけられている。

アントワーヌ＝ジャン・グロ 《アルコル橋のナポレオン》 1796年 油彩/カンヴァス



アルコルは、イタリア・ヴェローナ近くの沼や川が多い村で、「アルコル橋」を奪取することが、対オーストリア戦略上の重要な課題とされていた。

「ナポレオン」は、イタリア遠征軍の総司令官に抜擢され、「アルコル橋」奪取のために先陣を切って跳弾の中に飛び込んだ結果橋を奪うことに成功した。

画伯の素早い筆のタッチや生き生きとした人物の表情などは、新古典主義に倣いつつ斬新な表現を取り入れて、その後のロマン主義の流れが感じられる。